

陶町歴史ロマン 6



5、戦国時代

(1)戦国時代突入

8代将軍足利義政の後継争いに端を発した応仁の乱(1467年)が始まり、日本は戦国時代に突入することになります。

応仁の乱では、美濃の守護土岐成頼が西軍(総大将 山名宗全)について京都で戦います。

守護が留守の美濃国では守護代斎藤利勝はまだ幼かったため、後見人斎藤妙椿が国人長江氏・宮島氏の反乱を鎮圧するなど活躍します。

妙椿は山名宗全が亡くなった後、後見人でありながら西軍の指揮者になるくらいだから相当の実力があつたと推察されます。但し、妙椿没後、成頼の後継争いで妙純と利勝の争いが起こってしまいます。美濃を舞台にした国盗り物語の序章です。

(2) 戦国時代の東濃

応仁の乱に端を発した騒乱は日本中に広がり、美濃でもさまざまな反乱・侵略が起こります。信濃からは足利義晴の土岐氏攻撃要請(足利氏は土岐氏の力が強大になりすぎるのを恐れた)で信州の小笠原氏、木曾氏が東濃に進出してきます。信州勢が自国の問題(甲斐武田の信州への進出)で退却すると、土岐氏の分家小里光忠が旧領3600石を回復し、遠山氏も土岐氏の弱体化で相対的に力があがっていきました。

この時代になると、さまざまな記録・逸話等が残っており、私たちの町「陶」の近くでの戦国時代の歴史話として ①明智光秀の生誕 ②上村(かんむら)の戦い…その後の明智遠山家 ③岩村の女城主…武田による寺院焼き打ち ④小里家の復活、再興を考えてみたいと思います。

①明智光秀の生誕…陶の隣町で歴史を動かした人物「明智光秀」が誕生しました。

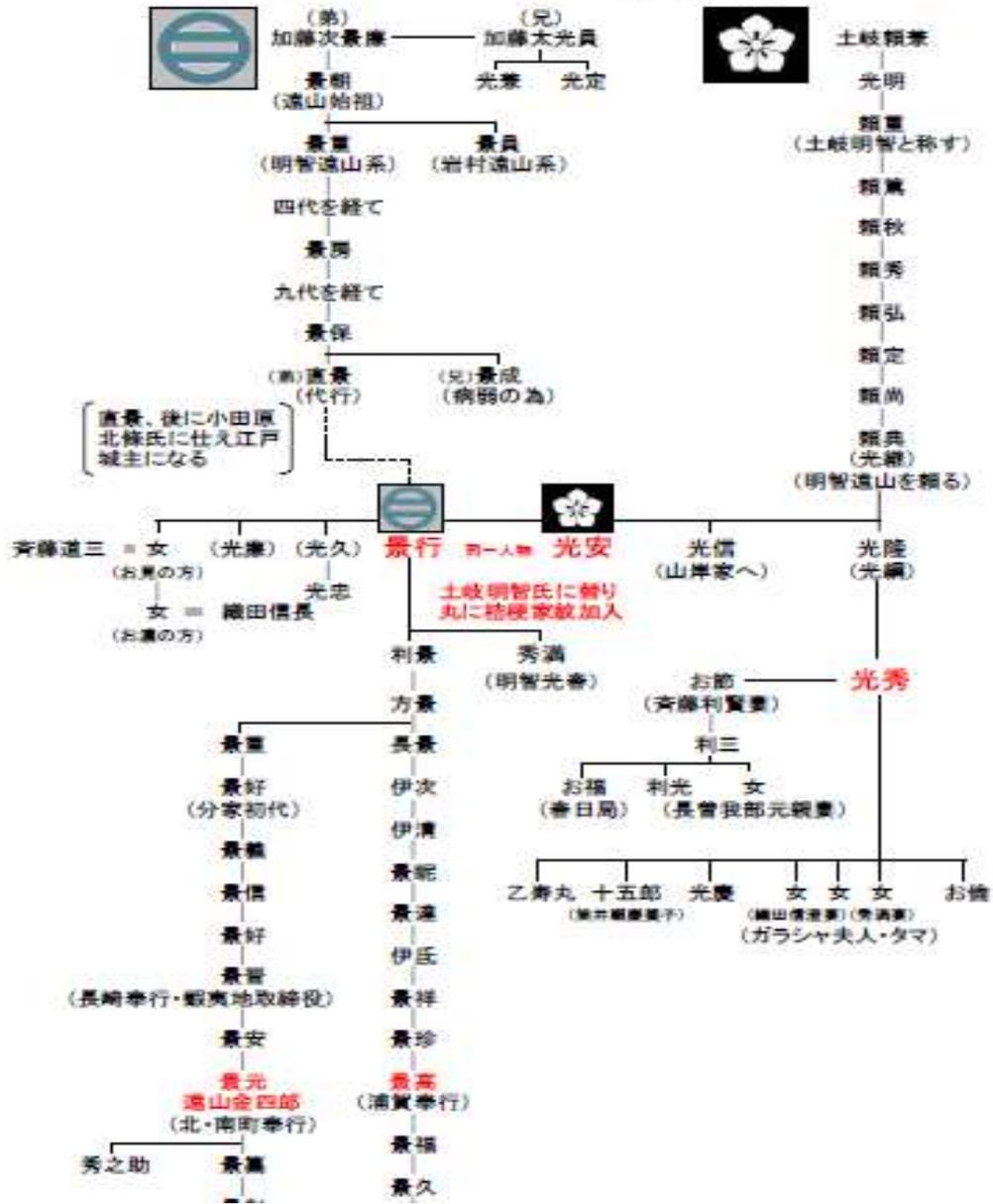
「郷土史の謎に挑む(服部酒造雄著)」によると、本能寺の変の首謀者「明智光秀」は土岐明智氏の出で、生誕地は恵那郡明智町とする説です。

概略は、岩村遠山家を本家とする明知遠山氏は、十一代直景の時(大永の頃、1511年頃)明知城を退去、士卒百八十余人共に小田原北条氏に仕えた。明知城は土岐明智氏へ移行する。明智光康(光安)がその人である。光康は光継(土岐頼典)の子で、永正6年(1509年)明知城多羅砦(千畳敷砦)に生まれた。退去した遠山直景の遺領を継いで自ら民部相模の守遠山景行と名を改め明智遠山氏で明知城主となった。



光繼（土岐頼典）の子（光康とは兄弟）に光綱があり、明智光秀は明智光綱の子（母は小牧）で、幼い時に祖母是空院により母とともに暇を出され母の実家である敦賀の小浜に逃れたという話しです。

【 明智遠山氏 土岐明智氏系譜概要 】



光秀の生誕地については、可児説が有力ではありますが、私はこの明知説を信じます。ぜひご一読を。

②上村（かんむら）の戦い…その後の明智遠山家

上村の戦いは、現在の上矢作町辺りを舞台にした織田方の東濃勢と武田方の秋山信友と



の戦いで、織田方は岩村遠山氏、明智遠山氏、苗木遠山氏、小里氏など東美濃勢に三河勢の奥平氏、菅沼氏らを加え、東美濃勢二千五百、三河勢二千五百、合わせて五千の兵力であったと言われます。一方武田方の秋山勢は約三千の兵ではあったが、その勢いは猛烈で三河勢が戦うことなく退去したこともあり武田方の勝利で終わっている。

この上村の戦いも 1570 年説、

1572 年説があります。多分 1570 年が正しいと思う。

また東濃側の総大将も岩村遠山景任説、明智遠山景行説があつてよく分かりません。

いずれにしてもこの戦いの内容・結果は前記のとおりで、明智城主遠山景行、小里城主小里光忠・光次親子など東濃の武将の多くを失っています。この当時、猿爪村は明智遠山領、水上村・大川村は小里領ですから、私たちの村からも郷士として出陣し戦死したり、傷ついた人は多勢いたことと思われま



秋山信友、途中にある遠山氏の砦を三方から攻める

上村の戦いで明知城主遠山景行、その長子景玄を失った明智遠山家は、景玄の遺児・一行が叔父・利景（景行の二男、当時は飯高万勝寺住職だが、後に還俗）の補佐を受けながら跡を継いだ。

明知城は天正 2 年（1574 年）武田勝頼に攻められ落城する

も、長篠の合戦（1575 年）で武田勝頼が敗走すると、利景の奮闘で奪還した。しかしながら、本能寺の変（天正 10 年（1582 年））が起きると、美濃は織田方と秀吉方に分かれ、秀吉方の森長可によって織田方の東濃の各城は奪われてしまう。利景らも三河に逃亡するも、小牧・長久手の戦い（天正 12 年（1584 年））が起きると利景は家康方について奮戦、明知城を森氏から奪還した。しかし、織田信雄と秀吉の間に和睦が成立すると、明知城は再び

秀吉方のものとなり、利景らは家康を頼って甲府に逃げていった。天正 16 年（1586 年）冬、利景の養子となっていた一行は、信州から駿府へ向かう途中、甲駿国境の平沢峠で凍死した。

義父の利景が領主となり、慶長 5 年（1600 年）の関ヶ原の合戦では、森氏から代わって明知城を領した岩村城主田丸直昌が西軍についたため、家康の命を受けた利景は田丸方の守る明知城を落城させ、その功で戦後に旧領回復を成し遂げて 6531 石の旗本となった。

ただし一国一城令のため、利景の子・方景のとき明知城は廃城となり明知陣屋を本拠地とし明智遠山領を所領した。

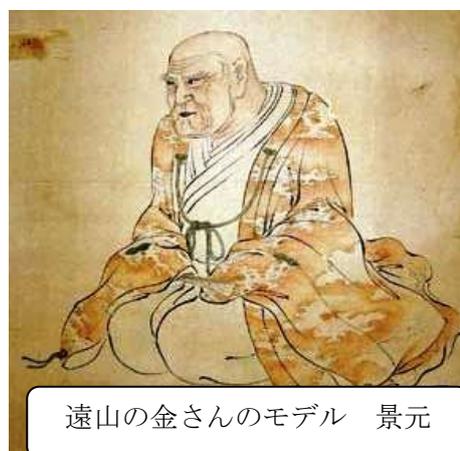


明智遠山家第 12 代遠山景高は安芸守となりペリー来航時の浦賀奉行を務めている。景高の五男信任は高家武田家に養子に入った。方景の孫による分家からは、江戸後期に著名な奉行遠山景元（遠山の金さん）が出ています。

明智遠山家に関する話しをもうひとつ。陶に関係する話しです。

串原遠山家は遠山右馬助景家が城主であった。上村の戦いで戦死する。その子経景が跡を継ぐ。串原遠山氏は、串原は勿論のこと、上村・下村を領有していた。従って上村で武田軍を迎え撃つのは串原氏にとっては当然の役割であった。

城を失った経景は明知城の遠山利景の許へ身を寄せた。利景は明知城の支城である落合山砦（千畳敷砦—明智町落合）を経景に守らせた。落合山砦は明知城を築城した遠山景重が城下を通る南北街道・中馬街道を監視するために設



遠山の金さんのモデル 景元

けたものである。利景を助け明智遠山氏の発展に寄与した経景は、明智の西、吉良見村・猿爪村に 500 石を与えられ落合砦に居を構えたといわれています。



そして元和 9 年 (1623) 9 月 19 日に隠居先の吉良見村で死去した。現在吉良見殿垣内 (とのがいと) には経景の埋葬地ではないかといわれる五輪塔がある。殿垣内という地名からも信憑性が高いと思われる。

左の写真がその五輪塔。

吉良見の八王子神社は、明知城主遠山利景に属した串原城主遠山経景が吉良見村・猿爪村を所領していた時に、主君のいる明智八王子神社と同じ祭神の神社を造営されたものと推測される。

③岩村女城主…近隣の恵那市岩村町は「女城主の町」として町おこしをしています。

元龜三年 (1572)、武田信玄は上洛の軍を起こした。このとき、秋山信友は伊那先方衆を率いて、美濃国恵那郡にある岩村城の攻撃を担当した。秋山軍の岩村城攻撃に際して、信長は織田信広と河尻秀隆を援将として派遣した。織田の援軍に対して秋山勢は伏勢 (敵を待ち伏せして、あらかじめ潜ませておく軍勢) をおいて、たちまちのうちに潰滅的打撃を与えて退けたのである。



信友は岩村城主遠山景任に降服を呼びかけたが景任はそれに応ぜず、返って、包囲する秋山勢に対して出撃してきた。遠山軍の奮戦に秋山勢もよく応戦し、遠山勢は戦死者を残して城内に引き揚げていった。この乱戦のなかで遠山景任は手傷を負い、結局それが命取りとなって

戦傷死した。景任の死を知った信友はふたたび降伏開城を勧告したが、籠城勢はそれに応じようとしなかった。

天正元年 (1573)、秋山信友は岩村城に攻め寄せた。城主の景任は死去していたが、未亡人 (織田信長の叔母) おつやの方 (修理婦人とも) は、養子として迎えていた信長の六男 (五男とも) 御坊丸 (勝長) を城主として、織田からの援軍が来るまで徹底的に抗戦する

ことを主張した。しかしながら、この頃の織田信長は石山寺本願寺、越前の朝倉、近江の浅井、甲斐の武田など織田包囲網との戦いに手一杯で援軍を出すことはできなかった。

岩村城では、織田の援軍が来ることを信じて御坊丸を守り立てて防戦につとめ、秋山勢を城に寄せつけなかった。ところが、岩村城の重鎮織田掃部は信友との合戦をかわすため、おつやの方と信友を結びつけ、御坊丸の養育を条件に和睦を申し入れた。

これに対しておつやの方は猛反対したというが、城内も次第に窮乏状態となり、病死・餓死する者も出てきた。ここに至っておつやの方は信友の降伏勧告に従い、御坊丸が成人するまで信友が後見人となることを条件に、自身は信友夫人となり開城したのである。これを聞いた信長は大いに怒ったが、岩村城には秋山信友が入り武田氏の対織田の最前線を担うことになった。しかし、信友は夫人との約束を反故にし、御坊丸は甲斐に送られ人質とされてしまった。その後、9年間武田家の人質となっていたが、武田没後の天正9年(1591)に安土に送還され、その後犬山城主となるも本能寺の変で討ち死にしている。

岩村町はこの悲劇の女城主おつやの方を街おこしに取り立てているのです。

この信玄の命による岩村城攻めの際に東濃の地では多くの寺院を消失しています。信玄が東濃の地の寺を徹底的に焼き払うよう命令したのです。武田勢による寺の消失劇で有名なのは岩村の「大圓寺」ですが、大圓寺のみならず「飯高萬勝寺」久保原の「林昌寺」などこの地方の寺はことごとく焼き打ちされています。**その中には猿爪の「吉祥院」も入っ**



ています。吉祥院は梨ヶ根にあったといわれる寺で、最近まで寺跡がありました。

信玄は何故寺院を焼き払うように命令したのでしょうか。

信玄は美濃大圓寺に居る高僧希菴玄密に対し、甲斐武田氏の菩提寺である恵林寺へ戻るように何度も使者を送り要請したが、希菴は頑として拒絶したので、ついに怒った信玄は秋山長友に命じて希菴の殺害と大圓寺の焼討ち、そして東濃一円の寺院の焼討ちを命じたのです。



岩村町富田の大圓寺跡地

岩村城開城から約2週間後の11月26日、大圓寺に対しても武田勢が攻撃するとの噂を聞いて身の危険を感じた希菴は、共の者と寺から逃亡した。これを知った信友は刺客3人を送り、彼らは飯羽間で希菴一行に追付いて、飯羽間川にかかる橋の上で全員を殺害した。ところが、希菴の呪いなのか半月もたたない内に三人は気が狂ったり、狂った馬から落ちて命を落とした。それだけに留まらずその5ヵ月後、信玄が死亡している。そして信友も3年後には信長により逆さ磔に処されている。

上洛を目指した信玄でしたが、行軍の途中、信玄の病が深刻なものとなり甲斐へ引き返

すこととなる。しかし、その途中伊那路で信玄は「自身の死を 3 年の間は秘匿し、遺骸を諏訪湖に沈める事」や、嫡男の勝頼に対しては「信勝継承までの後見として務め、越後の上杉謙信を頼る事」の遺言を残し帰らぬ人となってしまった。

信玄の後を継いだ勝頼は、信玄の「自分の死後 3 年は死んだことを伏せ自国を固めよ。」との遺言を無視して（信玄の死は、死後間もなく信長ほかに知れ渡っていたので遺言を守り通すことはできなかった。）翌年には自らの力を誇示すべく東濃攻めを行っている。

この時に明知城も落城しているのに、飯高の萬昌寺、猿爪の吉祥院が焼き打ちにあったのはこの時かもしれない。

勝頼軍の東濃進出を知った信長は、二万の兵を率いて岩村城を攻めたが勝敗はつかなかった。この時、岩村城攻めの拠点として小里の城山に小里城築城を試みている。（小里の山城は、完成前に岩村城落城のため石積みのみで中止）その後、天正三年（1575）長篠の戦いで勝頼が敗走すると岩村城は孤立化し、織田信長の息子である信忠を大将とする二万の大軍が攻めてきた。

秋山信友は甲斐に援軍を頼んだが、長篠の戦いの惨敗に懲りた勝頼は、一旦は援軍を出発させるも途中で引き返させてしまった。信友を主将とする籠城軍は半年に渡って抵抗を続けたが、ついに兵糧つき、信忠の総攻撃によって攻め落とされた。捕えられた信友は信長の命でおつやの方らとともに長良川畔で殺害された。

信長は自分を裏切った岩村の本案遠山家を許すことなく、その後の秀吉の時代、江戸時代を含めても岩村城には二度と遠山家が入ることはなかった。

④ 小里家の復活、再興

小里氏は、「土岐元頼の子、土岐頼連が小里氏の始祖とされ、美濃守護土岐氏の威光のもと、小里の興徳寺の西に居城を設けこの辺りを支配した。この辺りには水上・大川も含まれると思われれます。小里川南に小里城を築いた小里光忠は、元頼が美濃守護職の後継争いで政房に敗れた（1496 年）後、諸国を放浪し、越前朝倉氏の援助があつて 1532 年頃、土岐郡と恵那郡の一部 3600 石を切り取った。」とあります。この恵那郡の一部というのが水上、大川のことです。



なぜ、越前朝倉氏は小里氏を援助したのでしょうか。

その頃、朝倉氏は美濃国の守護争いで土岐頼芸（政房次男）に敗れた土岐頼武（政房長男）を庇護下においたり、また頼武を担いで美濃侵攻を企てたりしています。小里光忠が東濃の一部を切り取った 1532 年頃には、再び頼武を庇護下においています。

つまり、時の美濃守護職の土岐頼芸と対立する位置にあつたのです。美濃乗っ取りを企てていたのです。したがって、小里光忠には東濃から中濃、西濃を牽制させる意図があつたのです。

光忠は小里領 3600 石を誰から切り取ったのでしょうか。

その頃の東濃は、信濃からは足利義晴の土岐氏攻撃要請で小笠原氏、木曾氏の進出を許していました。岩村を中心とした遠山氏も相当痛めつけられたと思います。しかし、小笠原氏、木曾氏も自国が万全でなく（戦国の常である内紛、そして甲斐武田の侵攻が始まった）完全な東濃支配までには至らなかったようです。したがって、小里氏は間延びした小笠原氏、木曾氏から切り取ったということだと思います。

しかし、元龜元年(1570年)甲斐国武田氏の部将秋山信友が美濃に侵攻し、明知城主遠山景行とともに小里光忠・光次父子は織田方として戦ったが討死した。(上村合戦-1572年説もあり)



小里氏の家督を継いだ光忠の子・光明は天正2年(1574年)に美濃国内の武田家の岩村城を攻める織田方の拠点として小里城を改修し、池田恒興が城の御番手となった。なお翌年岩村城が落城するとこの工事は中止された。光明は織田信孝(信長の嫡男…美濃守)に仕えたが、本能寺の変の後に豊臣秀吉によって信孝が自害した後は、光明は秀吉側近の森氏によって小里城

を追われ、和田姓を名乗って徳川家康に仕えた。天正19年(1591年)に旗本・和田光明として相模国東郡岡田郷(現・神奈川県高座郡寒川町)に領地を宛がわれている。その後、関ヶ原の戦いの功によって光明の子・光親は慶長5年(1600年)に土岐、恵那郡の旧領を再び与えられた。しかし光親の子・光重は嗣子がないまま元和9年(1623年)に亡くなったため、小里氏は断絶した。